

「らん、らんららんらんらん。らん、らんららんらん」

校舎の中を、喜びに満ちた歌声が響く。

その歌は一人の少女の口から奏でられていた。少女の背丈は低く、童顔で、一見して中学生ぐらいに見えるだろう。しかしその身に纏う制服がこの高校の生徒である事を物語り、胸元にあるリボンが、彼女が三年生である事を教えてくれる。

子供と大人の境目に立つ少女は、歌声のみならずその足取りでも喜びを表現する。踊るようなスキップを交え、気紛れにくるりと舞いながら、前へと進んできた。時折床に広がる赤黒い液体を踏み、飛び散った汁が靴やスカートを汚したが、少女がそれを疎み、気に留めるような素振りを取る事はない。

例え横たわる生徒の亡骸を前にしてもそれは変わらず、精々踏まないようにひよいと飛び越えるぐらいだ。

……少女は喜びに満ちていたが、その周りは惨劇と絶望に染まっていた。

校舎の窓ガラスは軒並み割られ、廊下には散らばっている。教室のドアは一部だけだが破壊されていた。廊下にはおびただしい数の人間が倒れ、ぴくりとも動かない。倒れている人間はいずれも首をへし折られ、深い切り傷を付けられている。一目でも見れば、その亡骸がなんらかの意思を持って作られたものである事は明らかだ。

そしてあちらこちらから聞こえてくる、不気味な羽音と、おどろおどろしい鳴き声。

最早此処は学校と呼べる場所ではない。死と恐怖と狂気が蔓延る魔窟であり、人間が居て良い場所ではない。この学び舎に放り込まれたなら、誰もが我先に外へ逃げようとする事だろう。

されど少女が向かうのは、校舎のより奥深く。

下駄箱がある正面玄関から離れて二階へと上がり、非常口と書かれた出口を素通りして三階へ。横たわる教師の亡骸を軽やかに跳び越えたと、その先にある屋上へとつながる階段を上った。

屋上の前には鍵の掛かった扉があった。普段は施錠されていて、今も掴んだド

アノブは回せない。しかしこの高校の生徒である少女がそれを知らない筈もなく、制服の内ポケットに手を入れ、一本の鍵を取り出す。鍵穴に差し込み回せば、扉の中からカチャリと音が鳴った。

少女は役目を果たした鍵を無造作に投げ捨て、屋上へと入る。
見上げれば、美しい秋の夜空が広がる。

そして地上に目を向ければ、明かりの付いていない町並みが見えた。

暗闇の中では、町の様子はよく見えない。けれども少女は、目の前にどんな光景が広がっているかよく知っている。殆どの家は焼け焦げ、人が住める状態ではない。道端には赤い染みが幾つも広がり、その中心には倒れている人の姿が幾つも確認出来る筈だ。逆に動いている人の姿は見付けられないだろう。パトカーや消防車はひっくり返され、治安の崩壊を物語る。

学校だけではない。町すらも阿鼻叫喚の地獄絵図と化している。

逃げ場などない。安全な場所なんて何処にもない。助けてくれる人も居ない。あらゆる希望を絶つ光景を目の当たりにし、少女は、にんまりと笑みを浮かべた。

それから舞うようにして、くるりと後ろに振り返る。

少女の目の前には、巨大な蠅が飛んでいた。

とても大きな、人よりも大きな蠅だった。三メートルか、四メートルはあるだろうか。それほどの巨体でありながら、大きな羽音を鳴らし、まるでヘリコプターのように空中で静止して見せている。挙句一体だけでなく、少女の前に居るだけでも十体は確認出来た。背後や校舎の奥からも羽音は聞こえるため、もっと増えるかも知れない。

恐ろしい怪物の群れであるが、少女は臆さない。心底嬉しそうな、可愛らしい笑みを蠅達に向ける。

そして少女は語り出した。

「さあ、この町の人間は残り僅か。若い女なんて、あと何人残っているのかしら？」
少女が尋ねると、蠅達はざわめくように羽音を立てる。ちらりと互いの顔を見合い、そわそわとその身体を揺れ動かした。

それらの行動がどのような感情に基づくものなのか、少女には想像する事しか出来ない。だが、明らかに理解している。この蠅達は人間の言葉を解し、その意

味を自分の概念に合ったものへと翻訳するだけの知能を有している。

尤も、そんな事など少女はとうに知っている。知っているから、こうして向き合っているのだ。

「貴方達のうち何匹が子孫を残せたのかしら。或いはもっと作りたい？ まあ、どっちにしる雌に飢えているのは間違いないわよね。こうして、私の前に来た時点です」

少女は一人で納得したように、こくこくと頷く。巨大な蠅達は少女との距離をじりじりと詰めてきたが、少女は後退りするどころか一步前へと踏み出した。

更に、あろう事か蠅達の目の前で自らの下着を脱いだ。

あたかもそうするのがマナーであるかのような、何一つ躊躇いのない動きだった。蠅達すら少女の奇行に驚いたのか、近づくのを止めてしまふほど。しかし少女は自身の行動を自制するどころか、スカートを脱ぎ、制服の上を脱ぎ、ブラも外し……ついには、産まれたままの姿を晒す。ほんのりと少女は頬を赤らめていたが、その顔に浮かぶのは羞恥の表情ではなく、むしろ妖艶な笑みさえ浮かべていた。

そして少女はその場に座り込むと、蠅達の方を向いたまま、ぱっくりと股を開く。それだけでは足りぬとばかりに、指先で自身の陰部を押し広げた。

くちやりと音が鳴り、開かれた膣穴からはとろとろとした愛液が垂れ流しになる。臀部までもがしっとり湿るほどの量だったが、されど少女は決して売女などではない。

その証拠に、少女が自ら広げた膣の奥には、はつきりとした膜が残っているのだから。

そして少女は、

「ほおら、まだ誰のものにもなっていない、初物よ……抽選一名限定、誰の物になるのかしら？」

蠅達を、平然と焚き付けた。

次の瞬間、少女は無数の蠅にたかられる——事もなかった。

何故なら蠅達が真っ先に向かったのは、隣に居た自分の同族。

その同族に対し、蠅達は暴力を振るい始めたのだ。それも小突くような軽いものではない。取っ組み合いになり、相手諸共墜落。屋上に落ちても争いは終わら

ず、ついには相手の頭を剛腕で振じ切ってしまう。そうして仲間を一匹仕留めると、まだ生き残っている仲間の下へと向かい、再び殺し合いを始める。

体液が飛び散り、頭がごろごろと転がる。足が千切れ、羽が挽がれ、内臓が撒き散らされる。

血飛沫が飛び交い、誘惑した相手が一匹、また一匹と減っていく。その光景を目の当たりにしながら、少女はにたりとした笑みを浮かべるばかり。それどころか頬を赤らめ、息を荒くし、外気に晒した肌をほんのりと汗ばませ……一層強い興奮に身を震わせる始末。

やがて蠅達の殺戮は終わりを迎える。一匹の身体が叩き潰され、中身の内臓が屋上の床にぶちまけられた。

最後に残った一匹の蠅が、まるで獣のような咆哮を上げる。

最も大きくて、最も強い勝者。彼が振り向いた時、少女は先程まで浮かべていた笑みを消し、恋する乙女のように蕩けた表情へと変わった。

やがて二匹の獣は、交わる。

少女は、この瞬間を待ち望んでいた。

校内で、町で、惨劇が起こる時よりも、ずっと前から――

昼休みを迎えた高校の敷地内。その敷地内の一角にある、体育倉庫の裏。

そこで二人の生徒が、その身を抱き合わせていた。

一人は細身の男子生徒。身長も高くはなく、顔立ちもあどけなくて、高校生と
言うよりは中学生っぽい見た目だ。

もう一人は、そんな小柄な少年よりも更に小さな少女。あどけなくて可愛らしい顔の動きに合わせ、栗色の癖毛が揺れる。

そして二人は、口付けを交わしていた。

それもただのキスではなく、舌を絡ませ、涎を互いに貪っていた。少年は夢中で少女の体液を味わいながら、少女の制服を強引に脱がしていく。小振りな胸を隠すブラが露わになり、スカートが脱がされて白い下着が外に出る。少女は自らの身包みを剥ぐ手を止めず、むしろそれを手助けするように自分の服を脱がして

いった。

やがて二人は口を離し、荒々しく息を吸う。

その中で少女・桑畑カイコは妖艶に微笑む。

「ふふ、すごいがつつき方ね」

「え？ あ、ご、ごめんなさい……」

「あら、どうして謝るの？ それだけ私が欲しかったのでしょ？ ほら……此処だっってこんなに」

「うぐっ!？」

カイコはなんの躊躇いもなく、少年の下半身……著しく膨らんだズボンに手を伸ばし、触った。少年は赤面し、ビクビクとその身を震わせる。

そしてもう我慢が利かないとばかりに、少年は自らのズボンを慌ただしく脱ぎ捨てる。

露わになる少年のペニスは、少年の身体に見合わぬ大きさを誇っていた。血管が浮かび上がり、激しく脈動している。

並の女子なら、最早悲鳴すら上げられないだろうサイズ。

「うふふ。思った通り、クラスで一番大きいんじゃないかしら？」

しかしカイコは怯えるどころか、愛おしそうな眼差しで見つめるばかり。

そして自らもまた下着を脱ぎ捨て、なんの躊躇もなく、己のヴァギナを外気に晒した。それも穢れ一つない、膜という生娘の証を残したものを。

「さあ、どうぞ。好きにして良いわよ」

「う、うん！ あ、でもその前に……」

カイコの言葉を受けた少年は、ふと思いついたように自分の制服のポケットを弄る。

そして取り出したのは、コンドーム。

典型的な避妊具を見た瞬間、カイコは先程までの色香が一瞬で消えた、呆けた表情を浮かべた。

「……何それ」

「へへ……その、三限目の授業をサボって買ってきたんだ」

カイコが尋ねると、少年は喜々とした様子で語り出す。

避妊をするのは大切な事である。特に未だ学生である彼等にとって、妊娠とは

人生を狂わす事もあり得る展開だ。墮ろせば良い、と言わないところに少年なりの誠意があるだろう。

しかしカイクは、そんな気遣いに感謝を述べようとしめない。

それどころか見る見る顔色を変えた。呆けたものから、憤怒に溢れたものへと。

「……冗談じゃない」

「え？」

「冗談じゃないって言ったの！ この、ヘタレ！」

いきなりの罵りに、少年は目を白黒させる。その不意を突くようにしてカイクは少年を突き飛ばし、自分の上から退かず。少年は尻餅を撞き、カイクは立ち上がるや脱がされた服を着直し始めた。もう、カイクに初体験を迎える意思はなかった。

「な、なんで……ぼ、僕、何かした？」

少年は戸惑いながら、カイクの真意を問う。カイクは少年を一瞥すると、不機嫌さを露わにした鼻息を吐く。

それから怒りを隠さない声で、少年の疑問に答えた。

「ええ、したわ。私はあなたのチンコが大きくて、繁殖力が強そうだからセックスしたかったの」

「ち……え、は、繁殖力……？」

「そう、繁殖力。女を確実に孕ませられると思ったから、アンタを選んだの。なに避妊具なんか持ち出されたら興が冷めるってもんでしょ？」

カイクの説明に、少年は呆けた。しかしそれも短い時間の事。少年の顔は焦りのような、心配するような表情を浮かべる。

「そ、そんな、妊娠を軽く見ちゃ駄目だよ！ 自分の身体を大事にしなきゃ……」
そしてカイクの身体を心配する言葉を掛けてくる。

興味本位で妊娠しようとしていると思われたらしい——だから、カイクはため息を吐いた。

「じゃあね。あなた好みの相手が見付かると良いわね」

カイクは手を振り、この場を後にする。

もうカイクは、先程までセックスをしようとしていた少年への興味など、すっかり失っていたのだった……

子孫を残したい。

生理が始まるようになってから、カイコは明白にそう思うようになっていた。理由はカイコ自身にも分からない。しかし込み上がる衝動に対する嫌悪はなく、カイコはその繁殖欲求を満たしたいと思うようになっていた。

即ち、強い雄とセックスをし、妊娠するという事。

学生の身分で子供を育てられるのか？ 幸せになれるのか？ ……そんな事は、どうでも良い。さながら昆虫が本能で交尾をし、やがて力尽きるように、カイコの内には破滅的な繁殖願望があるのだ。産んだ子供は適当に捨てれば誰かが拾い、育てるだろうとすら考えている。男と結婚する気も、責任を求めるつもりもない。子種だけを子宮に注いでくれれば良い。

故にカイコは繁殖力が強そうな……具体的ににはペニスの大きな男子を誘っているのだが、これがどうして中々上手くいかない。

どいつもこいつも世間体を気にし、将来を気にし、性交に挑んでこない腑抜けばかり。こつちから誘ってみても、明らかに惹かれていながら拒否する有り様だ。そんな繁殖意欲に乏しい雄など願い下げなので、却下していたら………ついに高校最後の年を迎えてしまった。

学生というのは最も性欲に満ちた世代の筈なのに、どうしてこうも次代を残そうとする意欲が薄いのか。知性や理性がその衝動を抑えている？ 理解出来ない。何故繁殖行為によって自らの血筋が広がる事に興奮と喜びを覚ええないのか。

このまま自分は、生命力と繁殖力に溢れる子孫を残せないのか。

そんな『不安』が過ぎり、放課後を迎えた教室の中でカイコは大きなため息を吐いた。

（いっそネットとかで男を漁る？ そーいうところはサクラが多いって言うけど、サクラをやるのは女の方だろうし、サクラを恐れないぐらい性欲旺盛と思えば……）

ついにはインターネットの力に頼ろうかと思ひ、自分のスマホを起動。ネットを使おうとする。

しかしカイコはトップページを見て、ふと操作する指を止めた。

自分の町の名前が書かれたニュース記事が目に入ったからである。どうせ顔も知らないような奴が死んだとか、泥棒がどうたらとか書いてあるだけだろうと思いつつ、無意識に指先はニュース記事のリンクをタッチする。

開かれた記事曰く、〇〇町（カイコの住む町である）の交番と連絡が付かなくなっているらしい。交番に人の姿もなく、職務放棄ではないかと云々……

奇妙な記事だとは思ったが、カイコはそれ以上の関心を抱かなかった。世界的に治安が良い事で有名な日本でも、この町の治安は特に良い方であると道徳だか社会だかで習った記憶がある。警察官が一日居なかったとしても、いきなり無法地帯になる事もないだろう。

仮に無法地帯になったとしても、女をレイプするほど繁殖力旺盛な男性が見付けやすくなるかも知れない。地元の治安など気にも留めず、カイコは今度こそ淫らなネットの世界に旅立つべく検索キーワードを入れようとした

その直後の出来事だった。

「おい、なんだアレ？」

クラスメイトの一人が、大きな声で教室内の生徒達に向けて尋ねた。

ちらりとカイコが視線を向けると、男子生徒の一人が教室の窓を、正確にはそこから見える外を指差していた。男子生徒の友人達が窓へと集まり、ざわざわと騒ぎ出す。やがて他のクラスメイト達も窓際に集まり、わーわーと盛り上がり出す。

何を騒いでいるのだろうか？ 普段は性的に淡白なクラスメイトなど興味もないカイコであるが、この時は不思議と関心を惹かれた。何気なく、クラスメイトと同じく窓の方を見遣る。

そうして向けた目は、すぐに見開かれた。

窓から見える、校庭の外にある町並み……そこから朦々と、煙が立ち昇っていた。それも一ヶ所だけでなく、見える範囲だけで十ヶ所以上から。耳を澄ませば消防車や救急車のサイレンが幾つも重なって聞こえ、それなりの数が出動しているらしい。

ただならない事が起きていると知ったカイコは、すぐに視野を広げた。

あれが全て火事の類とした場合、家々に火を付けた、或いは火が付くほど破壊

した『誰か』が居るといふ事。一度に十ヶ所以上という広範囲だ、一人の人間の仕業ではない。例えば武装したテロリストなどの、危険な武装集団がいるのではないか――

そう考えて警戒していたカイコだったが、突如己の目を見開く。それだけでなくまるで獣のような勢いでその場から跳び退いた。カイコの突然の行動に、窓を見ていたクラスメイトの男子の一人が気付いて驚いたように跳ねる。

彼にとって不運だったのは、偶々カイコの行動を見てしまった事だろう。もしも見ていなければ、今まで窓から外を眺めていたクラスメイト達が慌てて逃げ出した時、反応が遅れる事はなかったのだから。

しかし彼はカイコを見ていた。だから不運から逃れられなかった。

自身の真横にある窓が割れ、跳び込んできた『何か』に襲われるという不運から。

「げ、ごっ」

カエルが踏み潰されたかのような、鈍い声が漏れ出た。彼は『何か』に押し倒され、教室に横たわる。彼の首はあり得ない方向に曲がっていて、身体を小刻みに痙攣させていた。

『何か』はそんなクラスメイトの男子の頭に、そこらの女子生徒と大差ない太さの腕の『一本』を振り落とす。

無慈悲な一撃を受けたクラスメイトの頭は、ぐしゃりと音を鳴らして弾けた。ピンク色の中身を撒き散らし、真っ赤な水溜まりを作る。

クラスメイトの無惨な最期に、彼に止めを刺した何か……体長三メートルはあろうかという巨大蠅は、誇らしげにその身を仰げ反らした。

「ば、ば、化け物だあああ！？」

突如として現れた怪物の姿に、クラスメイト達がパニックに陥るのは必然。誰もが一斉に教室から逃げようとする。

まるでこの時を見計らっていたかのように。

窓ガラスを割って、無数の巨大蠅が教室内へと侵入してきた！ まさかの大群にクラスメイト達の恐怖と混乱は頂点に。反射的に他の生徒を押し退ける者、逃げようとして転ぶ者、右往左往する者……互いに相手の邪魔をし合い、避難は遅々として進まない。

哀れな獲物達に、巨大蠅が手心を加えてくれる事はなかった。教室内で肉が潰される生々しい音と、絶望と恐怖に満ちた悲鳴が響く。

「……さて、どうしたものかしら」

そんな阿鼻叫喚の声を聞きながら、一足先に廊下側まで逃げていたカイコは淡々と考えを巡らせる。

あの怪物の正体が何か、という疑問はある。しかし何よりも重視すべきは、あの怪物が人を殺すという点だ。未だ子孫を残せていない今、カイコとしては絶対に死ねない。例えばクラスメイト達を身代わりにしても生き残るつもりだ。

だが、問題が二つある。

一つは、どうやら惨劇が自分の教室だけでは済んでいないらしいという事。でなければ隣の教室や、上や下の階から悲鳴が聞こえてくる筈がない。一体何処に逃げれば良いのやら。

第二の問題は、数。

窓から外を見た時、教室に迫る巨大蠅は十以上確認出来た。上下階や隣の教室にも襲撃が起きているのなら、その数は数十、いやもっと多いかも知れない。数が多ければ多いほど回り込まれたり鉢合わせたりする危険が増すため、逃げるのが困難になる。

特に後者は、最悪今この瞬間挟み打ちに遭う可能性も示す。果たして自分の予想は当たっているのか……答えはカイコの目の前、廊下にずらりと並んだ窓ガラスの先にあった。

カイコは小さく笑みを浮かべ、やれやれとばかりに肩を竦める。

それからすぐに、全速力で駆け出した！

合わせるように隣の教室から、更にその隣の教室……同じ階にある全ての教室から多数の生徒が一斉に跳び出してくる！ どうやら他教室にも巨大蠅が襲撃してきたようだ。生徒達は無意識に巨大蠅から離れようとしてか一気に窓際近くまで走り、その後も窓際を走ろうとしていた。

カイコはそんな彼等と、教室側にある壁の間を駆け抜ける。

するとどうだ。窓際を走る生徒達が、廊下側の窓ガラスを破って入ってきた巨大蠅に対する壁となってくれたではないか。

「ぎゃあ!？」

「きゃあああ？！ 嫌あああああ！？」

逃げた先を予期していたかのように、続々と押し寄せてくる巨大蠅。生徒達は成す術もなく、一人、また一人と押し倒され、廊下に血糊と肉片を飛び散らせる。

阿鼻叫喚の中を、カイクだけが冷静に走る。

カイクの走っている場所が安全な訳ではない。教室にも巨大蠅は居て生徒を襲っている。例えば教室から出てきた生徒や、或いは廊下を走っている生徒目掛けて飛び出した巨大蠅と、運悪く教室の出入口で鉢合わせするかも知れない。そうなればカイクの華奢な身体は突き飛ばされ、廊下に転がる肉塊の仲間入りを果たすだろう。廊下の窓から突入してくる巨大蠅にしても、運悪く衝突する可能性は否定出来ない。

カイクが走っている場所は、あくまで窓際と比べれば安全というだけ。何時命を失ってもおかしくはない。

それでも、カイクは笑っていた。

望んでいたのは『選別』。不適合な遺伝子が淘汰され、次代に適応した遺伝子を持ってしていると『自然界』が指名した存在。死に直面し、子孫を残そうとする本能が解放された個体。

自分は必ず生き延びる。生き延びて、子孫を残してみせる。

そしてこの自分の繁殖相手は、襲撃を生き延びた者こそが相応しいのだと、確信していたのだから――

この学校の理科準備室には窓がない。

正確には一枚だけあるが、かなり小さい。人間ならば兎も角、体長三メートルはある巨大蠅が通る事は難しいだろう。もしかすると校舎の壁を破壊するぐらいの怪力はあるかも知れないが、そうなると隠れ場所の候補自体が無くなるので、考慮から外しておく。

巨大蠅から逃げ切り、この部屋に隠れて三十分……カイクはようやく一息吐いた。

ほんのついさっきまで聞こえていた悲鳴は、何処からも聞こえなくなった。窓

ガラスを叩き割る音もしない。巨大蠅の襲撃自体は、一旦は収まったようだ。

しかしそれは、巨大蠅そのものが校舎から居なくなつた事を意味しない。

カイクはゆっくり、物音を立てないように立ち上がり、理科準備室の扉の鍵を開ける。ドアノブを静かに回し、微かに開いた扉の隙間から隣の部屋である理科室の様子を窺う。

理科室には、巨大蠅の姿はなかった。

安全を確認したカイクは姿勢を低くし、置かれている机の影に隠れるようにしながら移動。今度は理科室から廊下へと通じるドアを横にスライドし、開いた隙間から廊下を覗き込む。

廊下は、真っ赤に染まっていた。

それがクラスメイト達の血によるものなのは、ごろごろと転がっている骸を見れば明らかである。隙間なく、という言葉が大袈裟でない数の生徒が横たわっており、あの巨大蠅がかなり念入りに殺していった事が窺い知れる。

ここまで殺戮が繰り返されてくると、生存本能が退化した現代日本の高校生が生き残れるか、甚だ怪しく思えてきた。適者の選別には淘汰が必要だとは今でも思っているが、根絶やしにされては繁殖相手が居なくなってしまう。流石にそれは困る。

(一人ぐらいは生き残っていると良いんだけど)

ところで脱落したのは誰だろうか？ それを確かめるため、カイクは理科室に潜んだまま、廊下に倒れている生徒達の顔を一人一人凝視。常人ならそのおぞましい死に顔を見る度に正気を失うだろうが、常人と感性が異なるカイクは淡々と死体を観察出来た。

その行動の中で、一つの違和感を覚える。廊下に倒れている生徒が、全員男子生徒である事に気付いたために。

(…：偶然、な訳ないか。男子を選択して殺したのか、それとも女子だけを攫った？)

目の前にある惨劇の理由を考えるが、巨大蠅に対する知識がない以上想像の域を出ない。彼等が事を済ませた後の現場を見ても、確信の得られる答えなど浮かんでくる筈もなかった。

何が起きたかを知るには調査が必要だろう。それに今後の行動…：学校から脱

出すべきか、それとも救助が来るまで安全な場所に隠れているべきか……方針を決めるためにも、今の状況を把握する必要がある。

カイクは扉を開け、廊下へと出る。素早く階段の角に身を隠し、耳を澄ました。危険が傍までやってきていないか、情報を集めるために。

その耳が、『嬌声』を捉える。

一瞬耳を疑った。されどどれだけ意識を集中して聞いても、嬌声にしか聞こえない声だった。若い女の……いや、断言しても良いだろう。十代女子の若々しい、されど狂ったように夢中になった喘ぎ声だった。

学校でセックスをしているカップルが居るのか？ カイク的には大変結構な事だ。繁殖力旺盛な男子ならば、是非自分にも種付けしてほしい。しかし巨大蠅が襲撃してすぐにも拘わらず、あんな大声を出せばどうなるかなど簡単に想像出来る。

そう、本当の疑問は、嬌声が中々止まない点だ。

何故巨大蠅はカップルを襲いに行かないのか。もしかするとその場所が、何かしらの理由で安全地帯になっているのかも知れない。カイクとて安全な場所に逃げ込まねば、何時かあの巨大蠅の餌食になるかも知れない。安全な場所は是が非でも知りたかった。

カイクは嬌声が聞こえた方へと足を進める。階段を降り、下の階にある廊下を渡る。どうやら嬌声はこの階の教室の一つから聞こえているようだ。

足音を殺し、背後と周囲を警戒しながら、カイクはゆっくりと声がする教室の前まで近づく。入口に掲げられているプレート曰く『一年A組』……極々一般的な教室らしい。

一年生の教室と自分達三年生の教室に、位置以外の違いなどあったのだろうか？ 強い違和感を覚えるカイクだったが、声は間違いなくこの教室から聞こえている。意を決し、中を覗き込んだ。

そしてその目を大きく見開く。

「はぁ！ ん！ んぁ！ あひ、んひいいいっ！♪」

教室の中心で、一人の女子生徒が嬌声を上げていた。

女子生徒は仰向けになり、所謂正常位と呼ばれる体位で性交をしている。口から涎を撒き散らし、目は半分白眼を向いていた。余程強い快感の渦中にあるのか、

をした訳でもないのに息は乱れ、心臓は激しく鼓動を繰り返していた。

そして自分の膣が、ぐっしりと濡れているのを感じる。

まずは深呼吸。ほんの少しだけだが気持ちを静め、辺りを見回して安全を確認する。巨大蠅の姿や物音がない事を確かめてから、カイクは教室の中へと入った。目指すは勿論、先程巨大蠅に犯されていた女子生徒。

カイクがすぐ傍まで近付いても、女子生徒はカイクに一瞥もくれない。いや、そもそも気付いてもいない様子だ。白眼を向き、笑顔にも見える顔のまま、弱々しく痙攣するばかりなのだから。

揺さぶってみたり、小声だが呼び掛けてみたりもしたが、女子生徒が正気を取り戻す事はなかった。どうやら精神が崩壊しているらしい。回復の可能性があるかは、専門家でないカイクには断定出来ないが……素人感覚では、この女子生徒は『駄目』であるように感じられた。

確かにレイプという犯罪行為は、心を壊すほどのショックを被害者に与える。理解は出来ない（繁殖力旺盛な男に襲われ、何が不満なのか）カイクでも、一般常識としてそのぐらいは知っている。

しかしカイクが見ていた限り、この女子生徒は喜々として巨大蠅と交尾していたように見えた。何より心が壊れると言っても、男を見て怯えるとか、外出出来なくなるとかの反応が基本だ。こんな廃人のような状態に陥る訳ではない。

推測するに、巨大蠅が何かしたのだろう。女子生徒を狂わせた上で、巨大蠅は彼女と交尾をした。そして女子生徒は絶頂の快感に耐えられず……という訳だ。そこまで推測し、カイクは疑問から首を傾げる。

何故巨大蠅は女子生徒と交尾をしたのか。単なる性欲の発散なら、その巨体で強引にレイプすれば良い。何なら殺して、下半身だけ使うという方法でも良いだろう。わざわざ狂わせて交尾をするからには、何か理由があるのではないか。

例えば、繁殖のために母体を活用したいから、とか。その可能性が脳裏を過った時、カイクはぞわりと身体を震わせた。

人間と巨大蠅、全く異なる種の間子供が作れるのか？ カイクが知る限りでは、普通は不可能である。巨大蠅が本当に蠅の一種だとしたら、受精卵からの発生過程からして人間とは違い過ぎる。しかし地球には、他の生物の精子を刺激として発育する生物種も存在する。他種の配偶子を利用する生物というのは、確か

に実在しているのだ。

そうした生物は卵子の発育開始の刺激として他種の精子を利用して、精子の遺伝情報は取り込まれないのだが……巨大蠅がレイプしたのは『雌』であり、巨大蠅が送り込んだのは精子だ。巨大蠅が繁殖するためには、卵子に自分の遺伝子を埋め込まねばならない。

だとすると産まれてくる子供には巨大蠅だけでなく、人間の遺伝子も含まれている筈。

蠅人間が生まれてくるかも知れない……常人ならば、その恐ろしい予想に恐怖するだろう。

しかしカイコは恐れるどころか、にたりと笑みを浮かべた。

「ああ、そうよね。子孫を残せるなら、人に拘る理由はない。ううん、人より生存能力に優れる種なら、その血を取り込む方がより子孫が生き残りやすい」
ぶつぶつと、自分の考えを呟きながらカイコは立ち上がる。

子孫をより多く残す事が、カイコの願いだ。

自分の血を引いているのなら、その子供が人の姿をしているかどうかなど些末な問題である。父親が人間でないというだけで、どうして拒む理由になると言うのか。

本能が鈍りきった人間を皆殺しに出来る力、異種の生物を孕ませる繁殖力、人間の雄雌を識別する知力……それらを自分の子が引き継ぐとすれば、これほど優秀な子孫は居まい。

カイコは、巨大蠅との子を心から望んだ。

とはいえ、この考えはまだ仮定の段階だ。もしかすると精子に見えたのは、巨大蠅の小さな卵かも知れない。卵だとしたら、自分の子孫は残せない。思い込みで全てを投げ出すのはリスクが大き過ぎる。もっと調査が必要だろう。

そして調査をするには『サンプル』が必要だ。

「……何処かに隠れている生徒が居る筈。そいつらを使いましょう」

カイコは喜々とした足取りで歩き出す。生き残った生徒を探すために。

そして彼女はもう、こそこそと隠れる真似などしない。確かに自分の考えに証拠がなく、今はまだ思い込みのままだ。しかし自分の中の本能は、あの巨大蠅との間に出来た子供には、自分の血が流れているとの確信を抱いていた。

なら、どうして見付かる事を恐れるのか。

油断している自分を見付け、捕まえようとする雄……そんな逞しい雄に襲われる事を、カイコは期待していたのだから――

その後、カイコは己の推測を立証すべく動いた。

サンプルは豊富にあった。巨大蠅は隠れている女子生徒を積極的に探し、交尾相手として襲っていたからだ。そうした女子を助ける事もなくカイコは観察し、研究を進めた。

時間も十分にあった。職員室のテレビで収集した情報によると、巨大蠅の襲撃は日本のみならず世界中で起きてるらしい。軍も出動し事態の収拾を試みているが、巨大蠅は身体能力や数以外にも知能が高いという特徴があり、苦戦を強いられているとの事。お陰で救助という名の邪魔も入らなかった。

そうしてカイコが観察出来たサンプルの数は五人。分かった事は以下の通り。一つ、巨大蠅が送り込んでいるものは精子で間違いない。射精直後のものを生物実験室に置かれていた顕微鏡で観察し、確かめた。

二つ、巨大蠅が口から送り込むものは媚薬の類である。抵抗する女子にキスをして、狂わせてから犯していた。逆に恐怖で動けない女子には口付けをせず、女子は狂う事もなかった。使わずに済むなら使わないという戦略らしい。

三つ、交尾後の受精率は100%。ほんの数時間で腹は臨月まで膨らみ、出産に至る。産まれてくる子はへその緒でつながった蛆虫だ。出産後に狂った女子もいたが、単に現実を受け入れられなかっただけと思われる。その後は巨大蠅とのセックスを楽しんでいたので、良い事だとカイコは思った。

四つ、巨大蠅の幼虫は基本的には完全な蛆虫型だが……時折人間に似た目や手を有した子が産まれた。間違いなく混血している。

五つ、産まれる子の数は一〜三匹。狂わされた女の方が出産数が多いようだが、サンプル数が少ないので断定は出来ない。

他にも細々とした情報も得られたが、大まかにはこの五つが重要である。この五つの情報が、カイコの今後を決めた。

そして――冒頭に至る。

巨大蠅同士を戦わせ、最も強い雄を選別したカイコは、巨大蠅との交尾に挑もうとしていた。勝ち残った巨大蠅は四メートル近い巨軀を誇り、腕や身体も全体的に太く、ごつい。なんとも雄々しい個体だ。

その腹部からは既に真っ赤なペニスが伸びていて、先走り汁らしきものが垂れていた。

「うふふ、凄いおちんちんね。人間とは比較にならない大きさ……あんなの挿入られて、どぶどぶ射精されたら、絶対孕んじゃう」

寝転がった姿勢のため、自然とそのペニスが目に入ったカイコは、無意識に笑みを浮かべていた。繁殖力の旺盛さは、子孫繁栄には欠かせない。彼との間に出来た子も、繁殖力に優れている事だろう。

巨大蠅はカイコの上までやってくると、その大きな腕でカイコの身体を押さえ付ける。ずしりとのし掛かる重みに、優しさなんてものは感じられない。何があっても逃がすものかという一方的な本能があるだけ。

そうだ。雄とはこうでなくてはならない。

孕ませようという強い意思に、カイコは子宮の疼きを覚えた。無意識に腰を突き上げ、雄を求めて膣穴がひくつく。とろとろとした愛液が、触ってもいないのに膣から溢れ出した。

巨大蠅はペニスを伸ばし、カイコの濡れそぼったヴァギナに生殖器を宛がう。まるで熱した鉄のようだ、カイコはその熱さに身動ぎした

瞬間、巨大蠅はカイコの処女穴に己が生殖器を突き刺した！

「んぐいいっ!？」

いきなりの挿入、それによる破瓜の痛み、カイコは悲鳴染みだ呻きを漏らす。初々しい女の器官は蠅の性器に押し広げられ、ぎちぎちと音が鳴っているような気がした。

カイコは苦しさを覚えるが、巨大蠅はようやく有り付けた雌の味を楽しむように、ペニスを動かし始める。

「がつ、あ、んっ、んぐい、あ、んんう……!」

気遣いのない性交に、カイコは苦しみの声を漏らす。

これがセックス。

巨大蠅は自分の肉壺を使い、射精を促すための刺激を享受する。そして自分の子宮の奥にある卵子を求め、ペニスは膣肉を掻き分けて少しずつ奥を目指す。快楽を求めるのと同時に、明確な繁殖の意図を露わにしていた。

相手も自分との子供を求めている。

もしも自分に雌としての魅力がなかったなら、もしも次代を残せそうにない：：例えば奇形だったり、病気持ちだったり：：と判断されたなら、自分を求めてこなかっただろう。自分との間に作った子供が、次代に繋がる子だと思ってくれているに違いない。

人間には、ずっと拒まれた。自分の繁殖方法に同意してもらえなくて、自分は子孫を残せないのではないかと不安にもなった。

だけど『彼』に犯されていると、自分を認めてもらえているような気がして：：胸がポカポカしてきた。

「はあ、はあ、あっ、んあ、あっ、はあ、はあ、はあ：：」

苦しみの声は、やがて熱のこもった吐息となる。巨大蠅のペニスと繋がっている肉壺は、微かにだがねちゃねちゃと淫靡な水音を立てるようになっていた。未だじんわりとした痛みが残っているが、それよりも強く感じる、痺れるような刺激が心地良い。

それが性の快感であると気付いてしまえば、全身が喜びで震えるようになるまでさして時間は掛からなかった。

快感を覚えると、膣肉から滲み出る愛液も一気に増える。ペニスの滑りが良くなったのか、巨大蠅の腰は段々と激しさを増していった。それが一層の快感を呼び起こし、ますます肉壺は湿り気を帯びた。

やがて蠅ペニスは最奥まで捻じ込まれ、こつこつとカイコの子宮の入り口を突いてくる。

「はぐうっ！？ んんう、あ、はあ：：！♪」

ビリビリとした快楽に、カイコは熱い悲鳴を上げる。

一度子宮の位置を見付けた巨大蠅は、執拗に子宮口に肉棒の先端をぶつけてくる。子宮を叩かれると今までと比較にならない刺激が走り、カイコの口からは喘ぎ声が溢れ出た。

身体がもっと熱くなる。

もしもこのままペニスの先が子宮口に突き刺さったら、中まで捻じ込まれたら、どうなってしまふのだろうか。子宮の中でペニスが増れ上がったら、どれだけの刺激が全身を駆け巡るのだろうか。

熱々の精液を注がれたら、卵子が精子に犯されたら、どんなに気持ち良いのだろうか。

「いっ——い、んぐう……!？」

想像した瞬間、頭の中で火花が散り、カイコはエクスタシーを迎えてしまう。膣肉はぎゅうぎゅうと縮み、蠅の生殖器を物欲しげに締め付ける。

そして子宮の入り口が、微かに開いた。

体験版はここまですりなります